私の肝に銘じた神屋君の至情！

外務省調査部長　栗　原　　正

人間の至情に感じた話，一ツ．私の話しは現在ブラジルのアリアンサで『栗原研究所』を創設し，在留邦人の文化的事業に盡瘁してゐる神屋信一君に就いてゞある．回顧すれば大正十二年，恰度，關東大震災の一週間以前，私は，かの大震災の悲報を船中にきゝつゝ福州領事として任地に着いた．福州に來て程なき日，臺灣より一面識もない青年が日本領事館を訪問してきた．私は，寧ろこゝろよくこの未知の青年を迎へた．青年は神屋信一と云ふ名刺を見せて，福州に來つて，日本人として活躍したい希望を述べたので，私も種々その事情をきゝ，知人を紹介して一先づ何れへか就職を求むる事に努力した．

◇……◇

しかし數日餘を經しも神屋君の適當なる職業がなく，所謂就職運動は頗る思はしくなかつた．一日神屋君は日本領事館に私を訪ね，私の小さな努力に感謝しつゝ再び臺灣へ歸ると云ふ決心を述べたが，私は氏との接觸中，氏がその半生を京都の一燈園にあつて，社會事業に獻身せる經歷をきゝ，ひそかに神屋君の人格を尊敬してゐた．『この人なれば何か出來る』かう思うた私は，神屋君の福州に止まる事をすゝめ，爾來，私自身から個人的に神屋君の世話をする事とした．こうする中に福州に多數の知人を持つやうになり，支那人の間に非常に尊敬且つ信用を受くるに至つた．

◇……◇

神屋君の仕事は自然に日本領事館の情報蒐集係，日本領事館と支那人との連絡係りと云つた樣になつてきた．時は恰も，蔣介石による國民革命運動の醱酵期にあつたので，神屋君は主として國民黨その他の革命的民軍との連絡に當り，有益確實なる情報を齎して我が領事館としては，大いにその便宜にあづかる所があつた．

◇……◇

約二ケ年間福州にあつて北支に轉ずる事となつた私は，從つて神屋君との

交友をも斷つ事となつた．話は躍進して七年以後となる，私は本省の文書課長としてあつた頃，一日突然ブラジルより『栗原研究所』署名入りの手紙をうけ取つた．不思議に思ふて開封してみた所，意外にも神屋信一君よりの通信であつた．この手紙の概要はかうである．

“自分は福州にあつた當時，非常なお世話になり，又貴君よりお金を拜借したが，これを返濟する機會なく，お別れして仕舞つた以來，自分は一家を引上げてブラジルへ移民してきたが，今日僅かの金をお返しするのは，反つて失禮とも思ひ，報恩の一志とも思ひ，貴君を所長として，自然科學研究のために，こゝに『栗原研究所』を創立した．この研究所の創立者はあなたであると云ふ事を私は常に一念として在ブラジル邦人發展のために努力し度い．”と云ふのである．神屋君のこの手紙に接した私は人間の至純な情愛に對して無限の感銘にうたれた．私は，神屋君に金を貸した事さへも全く忘れてゐた．神屋君の人格至誠この情感こそ，私の一生を通じて，常に私を動かす大きな『力』である．

◇……◇

今サンパウロ市にある日伯新聞を見ると，アリアンサ日本人移民地における『栗原研究所』の事業が詳細に紹介せられてゐる．今日研究所の事業は，京都花山天文臺の山本一清博士と連絡を取り，定期的に報告を花山天文臺へ送つてゐるやうである．又これは花山天文臺のブラジル支所でもある．私は事情の許す限り神屋君の事業に支援し度い．精神的にも物質的にも今後この研究所の發展の爲めに努力し度い．ひとり神屋君に對してゞなく，ブラジルにおける我が邦人文化事業の發展に努力し度いと思つてゐる．

（日本新聞，昭和10年1月17日より）

⊙ 「天界」が大改正され新「天文雜誌」が發刊される!!

本年秋本會の滿十五周年を機とし，永年の懸案であつた「天界」は**第十六卷より．內容を全て通俗化し**，而かも**縱組み**とし，專門部分（現在の黃色頁）は天文臺ブレテンと共に新しく「**天文雜誌**」として**發刊**される事になりました．